

# 脳損傷患者に紙おむつを使用している家族の実態調査

病院 看護部 4階病棟 澤田理紗 古田佳奈代 伊藤恵子

はじめに

脳損傷で排尿障害のある入院患者に対して看護師は細やかな観察をし、患者に合わせた排尿誘導を行っている。しかし、機能性尿失禁や神経因性膀胱による尿失禁がある場合は紙おむつを使用している。頻尿や夜間尿量の増大がある場合は紙おむつの消費量が多くなり、紙おむつが不足する度に家族へ紙おむつの購入を依頼することとなる。そこで、家族は紙おむつを購入することに負担はないか、看護師の説明は十分であるかを疑問に感じた。今回、紙おむつの購入における家族の実態調査を行ったので報告する。

## I. 方法

平成20年10月20日から12月26日までに脳損傷で尿失禁のある患者の紙おむつを購入している家族26名を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。

## II. 用語の定義

紙おむつの購入における実態とは、購入している紙おむつの種類・1ヶ月にかかる紙おむつの購入費用・紙おむつを購入している家族の負担感と看護師から受けた説明との関係とした。

## III. 結果

質問紙の回収は26名中、男性5名、女性14名の19名（回収率73.1%）だった。年代別では60歳代以上が7名で最も多く、次いで50歳代が4名だった。続柄は配偶者が9名と最も多く、次いで子が7名だった（表1）。購入している紙おむつの種類はテープ止め型16名、パンツ型13名、平おむつ型3名、尿とりパッド15名だった（複数回答）。また、購入している紙おむつの数は1種類2名、2種類8名、3種類7名、4種類2名だった。1ヶ月に負担している紙おむつの費用は1万円未満12名、1万円以上2万円未満5名、2万円以上2名だった。

家族の負担感は「紙おむつが不足していないか気になる」17名、「紙おむつにかかる費用が負担である」14名だった（図1）。

看護師からの説明は、「紙おむつが不足していないか気になる」と回答した17名中、「紙おむつのサイズ」「紙おむつの種類」は過半数が説明を受けていた。しかし、「1日に使用する紙おむつの枚数」13名、「1日の尿量」12名、「1回の尿量」12名が説明を受けていなかった（図2）。

## IV. 考察

看護師は排尿の自立に向けた援助を行うことや紙おむつの使用方法を検討することによって紙おむつの消費量を軽減することが必要である。そのために看護師は、1日に使用する紙おむつの枚数を推測するために、排尿日誌をつけ、1回尿量や1日の尿量、1日の排尿回数を参考に紙おむつを選択する必要がある。個別性にあった紙おむつのサイズ、種類、尿量に応じた吸収量が選択・準備できるように家族へ情報を提供することによって紙おむつにかかる費用を軽減することが出来るのではないかと考える。更に、家族が利用できる各自自治体のサービスの情報を提供し、活用できるよう援助することも必要である。今回の研究結果をもとに、今後の紙おむつの購入の指導に活用していきたい。

表 1 対象の属性 N=19

|    |         | 男 | 女 |
|----|---------|---|---|
| 年齢 | 20 歳代   | 1 | 1 |
|    | 30 歳代   | 1 | 1 |
|    | 40 歳代   | 0 | 2 |
|    | 50 歳代   | 1 | 4 |
|    | 60 歳代以上 | 2 | 6 |
| 続柄 | 親       | 2 | 1 |
|    | 子       | 1 | 6 |
|    | 配偶者     | 2 | 7 |
| 職業 | 会社員     | 2 | 2 |
|    | パート     | 0 | 3 |
|    | 主婦      | 1 | 6 |
|    | 無職      | 1 | 3 |
|    | 無回答     | 1 | 0 |

